

夕顔

泉鏡花作

一寸いちゆつと

白木の枠に磨硝子と云ふ詔への、氣取つたつもり  
の軒燈も、世界が不景氣なのと、場末なのと、此待  
合が寂れたので、格子の中に釣したのが何うやら魂  
迎への燈籠めく。

三和土に水を打つて、宵の濡場の、しつとりと有  
るのさへ、出入る婦人の蹴出しの色、袷取る艶に、  
うつくしく露を置添ふる風情はない。時節柄に葭戸  
も入れぬ、障子の破れ、壁の古さに、侘しく雨漏を  
思はせる。

唯、其處へ立つたのも、燈籠と雨漏に相應しい、  
皺の見える單衣の上に、薄羽織の裾の扱れた中年  
もの。細工よりは取次の商賣を主として、近い頃ま  
では表通りに然るいいへき店を張つたが、或る事情

から女房にようぼうに死しなれて、小兒こどもを二人抱ふたりかへながら裏路地うらろぢへ引ひ込んで、帳場ちやうば筆だんすの拔ぬさしにも、寸法すんぽうに狂くるひの來きた指物屋さしものや、一一 ばうと成なつた灯あかりの下の顔かほを見よ、長屋住居ながやすまひの近所きんじよでは、  
(あけら) と帽子ぼうしを被かぶせさうな名なは勘七かんしちと云いふのであつた。

勢いきほひのない聲こゑで一度呼よぶと、雨氣あまけと夜露よつゆのしとりと成なつた、麥藁むぎわらの帽子ぼうしを脱ねいで手てに下さげた。

「一寸ちよつと

」

屹きつと見み込こむ元氣げんきもなし。人ひとを呼よびながら自分じぶんは俯うつ向むく、足許あしもとの格子かうしき際はへ目めが着つくと、撮つまみ上げた盛鹽もりしほの眞新まあたしいのと、爪つめの高たかい、薄汚うすよごれた足袋たびとを見較みくらべて、腰こしすばまりに情乎しよんぼりしながら、はつと溜息ためいきが聲こゑ緯くろひ

「御免ごめん。」

ニヤ一一 と上頭うはあしで震ふるはせた、咽喉のどの戦わなく鳴聲なきこゑで、尻戸しりどが二三寸開ずんあいた隙間すきまへ、眉間みけんへ白しろい斑ぶちのある、大おほな顔かほを、ぬい、と出だしたのは三毛猫みけねこで、

脊筋の影が朦朧として、畝を築いて、障子越。

藪から虎に、勘七ぎよつとして、遁腰を後へ引き

つゝ、調子高に大に急いで、

「居なさらぬか。御免。」

と言ふ。

「はゝは。」

今度は人間。が、ぼやけた聲。直き其の框で、も  
さ／＼と動いた様子は、坐睡をしたに相違あるまい。

「どつこいしよ。」

と、欠伸と共に居合の呼吸で、ごと／＼と障子を  
開けて、五十有餘歳と思しき乾びた婆様が、衣もの  
も髪も、影のやうにもそりと立つ。

そも／＼是は八月の下旬である。 此日

は朝から糠雨で、暮方に一驟雨、風を誘つて、どツ

と来たのが、又小留んで、月を宿した雲脚早く、

空と水と入交りでもするやうに、宵から急に冷えて

来た。が、框の障子から古猫が覗いて、帳場に婆さ

んが船を漕ぐ。洪水は向島邊だと聞くのに、此の芝

浦も津浪が知らず、火の滅えたこと夥しい。

まだしも勿怪な僥倖は、婆さんが出ると同時に、  
こつそり變化した様子もなくて、件の猫が框に消え  
て失くなつた事である。

「多日。」と、何と、客の方から會釋をする。

勘七の顔を薄目で視て、

「おや、入らつしやいまし、旦那。」

「多目だね、あはゝ。」

と、つきもなく笑ひながら、吻としたらしく、勘

七は雨傘を立掛ける、紺蛇目傘ではあるけれども、  
恚る折から色氣はない、淺瀬に朽ちた棒杭也。

勘七は俯向いて衝と上つた。

ボン／＼時計と勘七姿見が、ふてゝベツかつこで  
向合つた、眞中に、天井が口を開いた穴の如き階子  
段を、腰の据らない立身で望んで勘七が、

「何方だい。」

「どつちにも何にも、旦那、へゝゝ。」と黒く  
開けた鐵漿口。其から霧を吐くかと思ふ、薄暗い茶  
の間の隅の電話の下から、又ツと出て、以前の古猫  
が、のさ／＼と二階へ攀る、茶色の煙が這ふやう。

「景氣は何んなですえ。」

「つい通りに先づ云つた」

勘七は二二階の

八疊で、卓子臺を前に控へたが、背後の床の間が淺

い處へ、壁が煤けて龜裂があるのに、何を感じたや

ら長柄、足柄の分ちも覚えぬ、鶉飼を墨繪の紙表具。

其の黒い本尊が

南無阿彌

陀々々、鴉に似て、贅澤な眞似をすると水に溺れる

段、諷する處あるが如し。で、旁々床柱を背負つた

指物屋の旦那にあらで、公賣の手傳ひに、襖を背負

つて腰を抜いた輕子の形。立入つて此を言へば、佛

尊を賣りに出て、御先祖の崇りで、金縛りに成つた

様子もある、勘七は我ながら、

「あゝ、陽氣も悪いが、景氣はどんなですえ。」

婆さんが生暖い煎茶を出して、食籠の松風煎餅、

色のみ常盤にして、颯々と風の渡る、浮世の塵の積

つたのを卓子臺に按排しつゝ、

「此の通り」

と投げた口が、欠伸の餘波で、

「で、ございますよ、はい。」と自棄らしく力  
んで言ふ。

此處か八疊、中仕切が階子壇の上り口で縦四疊、  
隔ての向うの六疊の三間を見通して、やがて二十疊。  
座敷は唯た此切ながら開放しに成つて茫と廣いのが、  
眞中に薄りと青みを見せた、まだ新しいが以ての外  
の安琉球、隅々の悪く赤茶けたは、苗代田へ水が溢  
れて一村飢饉のあはれが見える。かと思  
へば、鼠が片端へ手を掛けると、ぐる／＼と一卷き  
に成つて鄰家の廂合へ吹飛ばされさうなのに、濁つ  
た星のやうな、どんよりとある電燈が三箇。大空だ  
か、天井だか、同じやうな雲の往來である。

客は云ふまでもなく一人もない。先へ上つた猫も  
見えぬ。

「何處も同一ことだと云ふのぢや無いかね。」  
と勘七が茶を舐めると、絲底をひいて、重々と卓子  
臺が最う汚れた。

雙方水の出花なら、此さへ濡の機掛で、戀のいろ  
はも書くのであらう。

婆さんは籠に疊んだ小さな布巾で、効性なげに一撫で撫で、

「何處もおなじだと申します中にも、上も下もございませがね、此方などはお話しに成りますやうな  
んではございませんよ。はい  
「と、は  
つきり覺めた目が却つてしよぼつく。」

「お上さんは、媪さん、留守なんですかね。」

「はい  
先月、あの、旦那がお見えなさいました  
ー  
あれは確か、お盆前でございまして  
たつけかねえ。」

「え、其ツ切、何處かへ行つて居ないのかね。」

と餘の事に、勘七は先潜り。此だけは氣が早くツて職人らしい威勢だつた。

「有體は、おつしやる通り、お盆を見越しまして  
駈落をいたします方が可かつた程でございませがね、  
はい、は、は、は。」

と飛んだ世辭笑、鐵漿の見える口の端が、電燈の  
加減で變に輪取つて、

「とに角、此の屋臺骨を背負つて居りますので、  
錢湯へ駈出すやうに、手拭一本で、おさらばとも参

りません。精々ものいりをかなじんで、引越たての猫のやうに、二人でねえ、まあ、旦那、お帳場の隅に鼻を突合せて、縮こまつて居りますが。何うでございませう。あの晩旦那が、あの、何時も申すこととでございしますが、まあ、あの、お美しいのと御一所においで下さいましてから、一月餘、日に數へまして三十幾日が間と申しますものは、旦那え、其の何なでございますよ。」

と嵩にかゝつて乗出すばかり、急込んで言ふのを聞けば、

「お一人だつて、缺片だつて、お客様の影響も無いのでございます。」

「上さんも気が氣ぢやございますまい

ねえ、旦那、何を當と申すでも無いのでございますけれども、内に熟としては居られないと申しちや出歩行きましてね。はい、ついでと云ひましても、此の、月はじめ。眞晝間でございましたが、内の路地口で、旦那、馴染のお客様に出逢ひましたものでございますから、たしなみも忘れて、おや、可うこそ、さあ、おいでなさいました、まるで、引張りでございますよね。へ、あの、其の御仁もお弱んなすつたが、可厭だともおつしやらずに、む、待ちな。其處等を御覽なすつて、あの瀬戸物屋で買物をして、すぐに寄る、とおつしやるのが、角の荒物屋の筋向うが薬屋で、其の隣なんでございます。

では吃とですよ、か何か申して、素頓狂に肩を敲いて帳場へ駈込んで、上さんが、まあ嬉しい、お一方出来たよ、お馴染は難有いものぢやないかと、急に鐵瓶を掛けますやら、火入の灰を平しますやら、

も一度縁起棚へ、お燈明をあげますやら。くる／＼舞して、居たり、起つたり、さあ、それからでございますが、以上。」

と婆さんは恐しく極つた、生眞面目な、事も大仰な顔をして、勘七を膽つて、

「いくら待ちましても、おいでが無いのでございますね、へい。まさか、お欺しなさりはしまい、お身體に別條が有るのではなからうか、表は電車通ではありはせず、お怪我と云つた處で、もしや頓死をさつしやりはしまいかと、つい、目と鼻の間でございますだけにね、旦那、餘りお遅いので心配しまして、上さんが駈出して見に参りますと、お客様處か日盛りの炎天で、戸外に人もございませず、瀬戸物屋の店が寂寞して、石屋のやうで、口惜い所爲か、きんかくしがお石塔に見えて、蟋蟀が鳴いて居たつて、溜息を吐くぢやございませんか。」

お約束が瀬戸物だけに、お客様が駈落をなすつたらうと、ねえ、まあ、私が仕方なしに然う申したのでございますがね、はい、へー。

「成程。瀬戸物だけに缺落かね、はゝ。」と勘七も氣のない笑で、のめるが如く卓子臺に眉間を兩掌。又此の頭髮の伸びたのが頭痛がしさうな容體に見える。

「泣くより笑でございますよ、はい。それを聞いて、上さんが笑ひました顔を見ますと、あゝ、二十日餘りも笑顔と云つては見た事もないのに、其の笑ふのが當にした客に逃げられたこじつけ故か、と思ひますと、洒落を申した私の方が、氣の毒なやら、はかないやらで、つい、ぼろ／＼と泣きましたんでございますよ。」

としんみり云ふ、――成程、洗髪で晝夜帯の女中は辛抱が成兼よう――此の婆さんと女房とは、伯母姪の間と聞く。

「何事も成行きだよ。」と勘七も身に詰まされたやうに云つた。

「でございますが、其の旦那、成行を成行きにして落着いては居られませんかものでございますから、最う此頃ぢや神頼み。」

「はあ、神頼み。」

「へい、佛信心、心當りのお客の數ほど、彼方此方願掛をいたすのでございまして、今日も晩方から出ましてございしますが、いづれ、お百度を上げて居りますから、歸りますにはまだ少々手間が取れませうでございませう、が何うぞ旦那、御緩りなさいまして、はい。」

「然う緩りもして居られないのだがね。」

「どうか、然うおつしやらずと、お連様は、お連様、内の上さんに、お顔を見せて遣つて下さいまし。拝みますでございませう、和利益だ、と思つて。屹とあれでございませう、何方様かの満願の日に當りましてに相違ないのでござります、へい。」

「まあ、待つて下さい。」

勘七は言を壓へた手を、それなりに頸を抱いて、後退りをしながら、

「願掛けにお百度をあげる満願の夜に當つて、御利益と云ふ客が此の體ぢやあ、私・は御存じの指物屋だが、矢張り駈落をせにやならない。」

四

勘七は勢のない、屈託らしい、詰らなさうな、氣  
の抜けた、其の癖、落着かない顔をして、座敷の沖  
に唯一人、其の難破船を雲から覗く、淀んだ星の如  
き電燈の下に、兀然として、二枚折の金屏風を視め  
て居る。

驚いては不可ません！ 此の待合と、此の客にし  
て、金屏風。

乞ふ君、黄金の箔にも恥ぢよ。卓子臺の上には銚  
子と盞とあつて、燦爛たる這個色彩に對しながら、  
面に一點の紅潮を見ず、蒼しよびれて居るではない  
か。

然し不思議も、矛盾もない、實は其の酒には酔へ  
なかつた。―― 金屏風にも理由がある。

最一つ差置いた水焜爐の炭灰火が、がさりと中崩  
れがして、周圍に尉が白いにも係らず、鐵鍋は黒い  
穴の開いたやうに同じ卓子臺の上に閑却されて、並  
んで控へた軍鶏らしい仕出しの皿が、手着かずに、

上へ、じつとりと半紙の紙が掛つた處も、御注意を願ひたい。

孰も假名で澤山、繪解に因つて明かに解る

が、こゝに一つ説明の限りでないものがある。其は、あれ、其處に、軍鷄の皿の其の紙の上に、ぶつりと乗つた蟲である。羽の生えた蛆である、陰惨たる光を放つて、蒼く燃ゆる毒である、即ち蒼蠅である。此奴は勝手に來て、勝手に留つて、勝手に隙を狙つて居る、ために白紙の蔽もしたらう。が、果して軍鷄舐が目的歟。此の場の光景を以つて見るに、何うやら腐つた人間の腸を窺つて居さうでならぬ。あゝ、浦には近し、此が螢の亡骸だつたら、金屏風にも影が通つて、情も景も備はるものを、如何せむ蒼蠅である。勿論、説明の限りではない。

「矢張り、お電話はお掛けなさりませんのでございますね。」

様子を知つて婆さんが然う云つたのに、黙つて頷

く  
勘七は此家で、左褌して島田に結つた  
のを呼ぶのではない、圓鬘に結つた縷子の帯、餘所  
の妾と首尾するのであつたから。

「まあ、お久しぶりで、婀娜なお姿がをがまれま  
す。  
今頃おいでなさいますりや、一目見  
たばかりで涼しく成る。暑さも何も忘れるんだけ  
ども、と、初中終上さんとお噂を申すんでございま  
してね。眞個に、世の中に、あんな又雲のやうな、  
お色の白い方はあるものぢやございませんよ。」

「さあ、何うですかね。」とはぐらすでもなく、  
勘七は浮かぬ顔。

却説、酒と成つた。

「何しろお銚子を

で、婆さんは下屋へ下りた。

「あゝ。」

勘七は我慢も意地も忘果てた大歎息。

「人より前に猫が出る

此の二階へも、

のさり／＼先へ上つた。可厭に陰氣だ。居睡からこ  
ぢ起された、あの婆さんの下りて行く後姿は何うだ

らう。汗あせだらけの衣えもん紋もんが、べつとりと摺ずり下さがつて、や  
れ／＼、帯おびの結むす目びめがぶらんとして、あれ  
で黄色きいろけりや、其そのまゝの尻しつぽ尾ぽだ。

不ぶ氣き味みだなあ。ー

勘かん七しちは、などゝ思おもふ。

五

「恚う又馬鹿な、待合で猫を氣にするのは、お寺で亡者を可厭がるやうなもんだけれど、矢張り心持だ、時と場合に因る

藝妓をして居る中に、生命も身上も入上げて、それで此方の意地が通つて一分でも立つた事か。婦は今ぢや他人の妾。初手は色戀で逢つたのが、情に搦んで、忍んであひゞきをした内はまだしもだつて此の頃ぢや婦も何うやら眞個の義理で出て来るらしい。

無理もないが、我ながら頼母しくないからな。婦のために氣苦勞して、身代と一所に、見す／＼疲せて、乳から胸、胸から咽喉、咽喉から顚、あゝ、そのどれも美しかった、顚から頬と段々に消えて了つた死んだ女房の思でも、婦とは末は遂げられまい、と云ふうちに、最う十日に三度が、月に二度、間四十日も途縫えるほど出逢が煩しくなつて居る。

家には小児が待つて居る。六歳と三歳の頑是ないのに、乳母を付ける資格もなし、子守兼帯の少女一人、恠うしてぶら／＼出て居ちや、嚙ぞ長屋中此沙汰で、口の端に掛る事だらう 歸る家さへ敷居が高いものを、居心の可い待合が天から授かる道理はない。變に冷つく。簾が煽る。じと／＼と生温い、幽靈の濱風だ。可厭な空模様だ。婦が出るのに故障が起りはしないだらうか。最う何の彼のが小煩い、これで婦が来て逢ふのを合圖に、息を引取りや世話はないに おゝおゝ古い天井だ、大な俺の影法師だ。

あゝ寂しい影だ。

「

「はい、お待遠様。」

「あ！ 媪さんか。吃驚する。」

「えゝ、何を吃驚なさいます あの方だ

と思召した處へ、婆ぢや、化物のやうにお見えなさ

いましたのでございませう、はい、へゝゝ。」

と、それ其の鐵漿口。

「いや、化物は此方こそ、一人でつくねんとして

居る處は、狐か狸に見えやしないかね。」

「可厭でございますね、あんな事を。」

「然う云へば猫は何うしたい。」

「猫？ でございますつて

「それ、先刻、框へ顔を出してから、二階へ上つ

て来たぢやないか。」

「え、あの、お駒。」

「お駒。」と、勘七は聞返す。

待人の名なのである。

「此の呼吸だと、駈出しの女中にも分るので

あらうけれども、女房の伯母さんには一向に氣が付

かなかつた。

「へい、駒さんと云ひましてね、露地鄰の非商屋

さんのでございましてね、雌猫でございしますが、そ

れは旦那、鼠を取ります大達者。もう取盡してお鄰

には居りませんものでございますから、此の節ぢや、

手前どものを構つてくれるんでございますがね。家

も寂れますと馬鹿にして、此の又鼠荒れますこと。

夜中に上さんと二人で、起直つて、何うしようかと

顔を見合せるほどでございましたのに、彼が來てく

れて、眞個まったく一晚ばんに十三銜くはへたことさへございます。  
此この四五日にちは、風かせがなければ音おとのしないほどに静しずり  
まして、全まくおかげでございますので、最もうお駒こまさ  
んお駒こまさんと申まして、内うちぢや獸けもののやうには思おもひませ  
ん。

眞個ほんたうに、よく申ますことでございますが、お駒こまと云  
ふ名なは猫ねこにつけると、よく鼠ねずみを取とりますし、女をんなの子  
につけますと、別べつ嬪げんでね、旦那だんな、それは／＼男殺をとこころしい  
し。

「へい、男殺をとこころしいし？」  
と可い厭やな顔かほをした。

さすがに、フツと氣きは付ついたが、引ひくには引ひかれ  
ず、婆ばあさん恍とほけた色いろして、

「と申ましますよ。へ、へ、へ、お心こころ當あたりでも。旦那だんな。  
と、てれ隠かくしに調てい子しを高たかめて、御遠慮ごえんりよは申まし  
ましたが、婆ばあのお酌しやくで、さあ御一杯おひとつ。」

利きく手てに受うけると、少すこし陽氣やうき。

「十三匹じふさんびきは、えらいもんだなあ。」

六

「何しろ人氣が少うございますから、鼠の數と申しては、そりや無いのでございますからね、旦那、二階などは全つ切空屋同然だものですから、三十五十一齊に駈歩行く騒動  
私どもを馬鹿にするのでございますよ、はい。」

「媪さん、御飯が未だなんだから。」

勘七は唯さへ滅入る。陰氣と不景氣が、ばら／＼と尻尾を生して暴廻るやうな鼠の話に、うんざりして、箆笏を嚙つて一張羅に穴をあけられた泣言が出さうな處を遮つた。

「御一所に へい／＼、召食りものは存

じて居ります。」

と些とは人間に返つて出て行く。

「これだ。」

豫て期したるものゝ如く、勘七は猪口を覗いて眉を顰めながら、注置きで冷めたのを、一杯杯洗にざぶりと開けた。嘉すべが入つて居たので、場合が場

合、酒から河童が出たやうな氣味の悪い顔をした。

「臺所も狭いから、竈の傍に土用越の樽と来て居る。眞夏、雑と四十日、口をつけても涎ぐらゐる。6 にしか注いだ事の無い溜です。徳利も如件だ。蓋をしない古井戸同然、中から何か出ようも知れん！」

と手酌で思切つて、どぶりと注ぐと、牙、蓋の弱やに、  
小さい模様を、山の如くに壓して、蛆が泳ぐやうな、  
ぶく／＼と膨つた鼠の糞。

「崇だなあ。」

とぐたりと俯向いて、寂滅らしく、げんなりする。

其處へ婆さんが、

「はい、旦那、おあとの熱いのが参りました。」

「お世話ですよ。」

と少し憤氣。

先の銚子と入替に振つて見て、

「おや、些とも召飲らないで、お蓋が

おや／＼、おやまあ」

と婆の瞳が、鼠のそれと同じ影に、酒に映るほど

熟と覗いて、

「飛んでもない蛞蝓が。」

「え、蛞蝓。」

と、勘七は堪らない弱切つた顔を上げて、

「そりや鼠の屎ぢやないのかい。」

（ないのかい。）と彼は云つた。

「へい、成程、まあ、大々と思切つてふやけましたこと、へ、へ。」

と唐突に笑ひながら、とぼんと忘れたやうに寂しい眞顔で、

「私は又蛞蝓かと思ひましてね 否、そ

れは、事も大層な蛞蝓でございましたね。夜分寝て居りますと夜具の上を這ひまして、此の間なんぞは、上さんの小搔卷の天鷲絨の襟を臺なしにして、私の頬邊を傳るだらうではございませんか。其の時も二人とも飛起きました。

流許から、三和土から、出ますが、鹽と云へば俵ごと石灰ぐらゐに振撒かないでは追付きません。塵取に取ります處が、山装一杯。

棄場すてばがございますまい、旦那だんな。お鄰となりの羽目はめへ障りさはませんやうに、溝板みぞいたのわきを掘ほつて埋めようといたしますと、其その穴あなが又また蛞蝓なめくぢで一杯いっぱいなんぢやございませんか、悚然ぞつといたしましてございますよ、へい。

あれもね、甲羅經かぶらへると化けるものと見えまして、赤あかいのが居をりましてね、大おほさと云いつたら、佃つくたから賣うりに來きます粒選つぶえりの海鼠なまこぐらゐ、角つのが生はえて居をりますよ、へい。大將たいしやうでございますかね。それが幾いくつでも出でますから、兵隊へいたいさんは數かずも限かぎりも分わかりません。ぬる／＼湧わいちや推寄おしよせて參まゐりますやうでございましてね、夜半よなかに熟じつとして考かんがへて居をりますと、ぞろ／＼聲音あしおとがしさうで氣味きみが悪いやうでございませぬ。

まあ幸さいはひと、二階にかいへは澤山たんとあがりませぬ。――あゝ、然さう／＼、上かみさんに言いはれたのを忘わすれました。

お客様きやくさまがおいでに成なると、此これを。――

と立つて――窓まどへずらりと簾すだれをおろした――片隅かたすみ、戸袋とぶくろの壁かべに着つけて、裏うらを折をつて立掛たてかけた、棧さんに伸上のびあがるやうにして手てを掛かけたのが、こゝに開ひらかれた金屏風きんびやうぶ。

婆ばあさんの、鼠ねずみのやうな圓鬚まるまげの上うへから、簾すだれを透すいて、

物<sup>もの</sup>干<sup>ほし</sup>の柱<sup>はしら</sup>が、雲<sup>くも</sup>で揺<sup>ゆ</sup>れるか、と其<sup>そ</sup>の時<sup>とき</sup>見<sup>み</sup>えた。

「旦那、上さんが此は、お茶屋に奉公をいたして居りました時から希望で、世帯を持つて待合を初めたら、何はなくても是非金屏風を、と云ふのでございましてさうで。 ついで達きません處から、彼處だ、此處だ、と手入やら、繼はぎやら、雨露の方にばかり掛つて、其のまゝにして居りましたが、鼠にはお駒さん。が、蛞蝓でございます邪氣なり濕氣なり、黄金は惡氣を拂ふ、此の商賣の隙なのも金屏風を買はなかつたからだらう。と然う申して、へい、苦しい中から。」

私は止したが可からう。夜着の襟さへ遭ふのをも、を、ずる／＼傳はれて御覽なさいまし、金屏風は一度で重なし 景氣も直つて引越でもしてからのの方が、と申して留めましたのでございますがね、何でも惡氣を拂ふから、と然う云つて、しかし念のためにね、旦那。誰方もおいでになりません時は、裏を向けて伏せて置くのでございましてね、はい。

と云ふ念入な縁起附で、お開帳ほどの勿體。饒舌りながら、立ちながら、徐々と割つて開くと簾越しに見透す屋根は、射込んで稲妻稲妻を浴せさうな暗さだつたが、有繫に座敷の其の隅だけ、颯と二折切抜いて、夜が明けたやうに輝いた。

唯、見る間も無かつた。ドンと地響きを打つ、沈んだ陰氣な音がして、大なものが倒れた、と聴くや、ばた／＼ばた、どん、づしん、氣たゝましい、人数の登音。

はつと呼吸を詰めて、思はず勘七が膝を立てた時、婆さんは突抜けさうに簾から首を出した。

「何だ、火事か。」

「へい。」

と怯えた聲をする。

途端に、がら／＼と格子戸が開いた。が、金屏風の下に響いたのは、其處が露地の、此家の勝手と向ひ合つた家らしい。

續いて、すた／＼と駈出す響。

「手が入りましたのかね、お向うさんへ。」と、  
今度は然まで慌てもしないで、様子を見にやら婆  
さんは階下へ下りる

「尋常でない。」

勘七は血相した

如何にも尋常でない、

變な、重い、意味の籠つた響であつた。

ぶる／＼震ふ手に、二度目の銚子を注いで見たが、  
「何の因果だい。」

で、ざぶりと又覆けた。

「餓鬼道の苦みだ。こりや、俺あ寂滅だぞ。」

と卓子臺に、がつくり突俯す。

「頓死したのでございます。」

「

「お向うの大工さんの爺さんでございませうがね、  
へい。不斷達人な人だけに、途中でございませう。

晩にお極りの三合で、可い機嫌で、いつも講釋場へ  
出て行きますのが、今夜は若がへつて、活動へ行か  
うと申して、三和土に下りて下駄を突掛けましたと  
思ふと、ぶつかへりましたさうで。どしんと

其の音だつたのでございます。」

「ぢや人の死んだ音だ

死んで了つたの

かね。」

「如何でございますか、下駄の下には大きな蛞蝓の赤いのが居りましたさうで。近づいた拍子、打所が悪かつたんでございませう。うん、と其

ツ切。手間取が一人お醫師へ駈出します出會がしらに、旦那、濟みません。入つて来た出前持が打つたつて、お汁を溢して了ひまして、すぐに取つて參ると申しながら、若いものツて仕様のない、お向うの騒動を、立つて覗いて居ります。叱言を申して遣りました、御免なさいましょ、はい、すぐに。」

と云ふ。焜爐と、軍鶏の皿は並べたのに

「あゝ、こりや何だ、死んだ訃音と鉢合せに打つかつたんだ。」

「滅相な、お醫者へ行く使なんでございますよ、へい。」

「年寄の卒中なら、醫者も坊主も同じやうなものだらう。」

「然やうでございますともね、はい。」

いや、あけらの勘七生命が危い 見る間  
に窪みさうな目で、せめて娑婆に居る表象らしい金  
屏風を視める、と、何と、それが燦と輝いたのは金  
色だが、亡者を迎にござる阿彌陀如來が虚空通行の  
道筋の後光らしい。

こゝに、勘七が更めて、車子臺を離れて、壁の前に膝組に及んで、金屏風を一人瞻めて居る、焜爐の火が白く成つて、皿の紙に蒼蠅がボトンと青光に留まつて居るのは、――それから、良頃刻經つてからの事なのである。

それまでは伸つ、反つ、苛つたり、悶えたり、立つたり、居たりで、階子段の口までも、五六度往つたり來たりした。

婦が何時までも來ないのである。

待つほど焦る。焦るほど待たれる。あゝ

して、恚うして、と逢つてからの事が、嬉しいやうに、口惜いやうに、むず痒いやうに、身震が出るやうに、胸も張裂けるほどののが、口にも聲にも出るので無いから、心が亂れて、凄いまで、目ばかりが据つて光る。

「お遅うございますね。」

「些と手間が取れるんだよ。」

變に言譯らしく云つたのも初手の内で。

「御退屈様でございませう。」

「何。」

とばかりが二度めであつた。

三度婆さんが上つて来て、

「眞個に何う遊ばしたんでございませうねえ。」

「知らないよ。」

最う大分苛つて居て、對手に突掛るやうだつた、  
が、詮方も無き次第。婆さんは客の立てた腹を横に  
寝かして、其處で枕を置いて行く。

勘七はどたりと仰向けに轉がつたが、待草臥れた  
手足が萎えて、ぐつたりと成りながら、妙に胸ばかり  
り硬ばつて、天井の壓に打たるゝやうに、廣い座敷  
も幅つたい。

此の折から、向う長屋の大工の内で、小雨も降る  
か、濕つぼく、もこ、もこん、もこ、もこん、もん  
／＼もん／＼と通夜の木魚を敲出す

「愈々不可い。」

醫師が来て検診が終つて、死んだのが極つて

騷動が止んで、白木の机、櫛、枕團子、と思ふと、立山地獄で煙草でも呑むやうな脂くさい、安線香の香が芬と鼻を突く。支度が済んで徐ろに通夜をはじめた木魚の音。で、時刻は大分経つたのであるが。

猫で、鼠で、上さんがお百度で、銚子に藁の、蓋に糞。頓死に汁が鉢合せ、通夜の木魚でお念佛、と揃つたと成ると、新婚の屏風が廻つても大概な縁は切れる。婦が来た處で浮いた言の一句も言へまい。――第一、どんなに度胸を据ゑた日にも、婦の歸らねば成らないと云ふ刻限が早過ぎる。

南無不可思議光、法藏菩薩因位時。もく／＼も／＼ん、と木魚の音。

「あゝ、情ない。」

邪険に殺した女房の手觸りが、何うやら搔卷の裾に掛ると思ふと、希有な事には、重い額が裂けたやうに、括枕が二つに分れて、一つが六歳、一つが三歳の、内に置いた、兒ども達の、橙のやうな、才槌のやうな頭に成つて、やはり、ごつんと腦に響く。

もく／＼、もん／＼木魚の聲。

すぼん／＼と額に抜けて、きなツ臭いまで鼻を貫く、頭腦が痺れる。

「あゝ、堪らない。」

勘七はむつくと起きた。が婦と添でもしたほどに、小搔卷の裏に亂れて、はだかつた胸を合せて、貝の口がぐたりとした帯を取つて、きりりと廻す手に――羽織こそは脱いだが一――雇の小女の前も用ありさうに、當の無い外出の折も、まじくなひに挿して居る、曲尺が手に觸つた。

勘七は拳で握つた。

「身體中、正しいものは此一つ！」

唯、光を放つ金屏風。

勘七は抜いた曲尺を扇にと取つて、居ずまひを正しく、茶に呼ばれたものゝやうに、金屏風の前に摺寄つた。

蒼蠅が狙ふと知らずや。

薄りした彩色の、覺束ないまで、殆ど、胡粉ばかり。其れも金色に消されたのを、爰に心を留めて間近で見ると、屏風には、夕顔が描いてあつた。

白群で流した歌もなし、墨で留めた蟲もなく、あはれに果敢い夕顔の淡雪積る花の數。葉はたゞ花を密とのせ、蔓はたゞ密と花を結んで、緑青の淺い、其れも白い。

荅と、半ば開いたのと、大輪なのが二三枚、そよ／＼と煽つ簾に、影が戦きさうである。

勘七は、まだ恚うした境遇に落ちない以前に、毎  
年鉢に培つて、此の夕顔を誇とした

發句も歌もあるのではない。こゝが職人を兼ねた  
指物屋の旦那である。右の曲尺を取つて、其の大輪  
に當てゝ見た。寸法を計るとは言へ、通夜の木魚と  
蒼蠅を前後に、蛞蝓を拂ふ濕氣よけと云ふ金屏風に  
對して、待合の二階で密通する餘所の妾に焦れなが  
ら、花の夕顔の繪の輪に、曲尺を規したは少し怪し  
い。

唯、性根を、全ツ切落したやうに、手から、ぱたりと曲尺を離れた。それが、がらりと畳に鳴るまで、三の間に三つの電燈が、例のどんよりとして寂しいのである。

勘七は花形の爪の伸びた指を當てた。

「然うだ 眞夏の目盛が、却つて人目が

無いと云つて、岨裏の木の下闇であひゞきした時

ー 辿り着いた私は草臥れて踞んで待つた。やがて二時待つた。涼傘もさゝずに忍んで

来て、（踞んでちや見ツともないわ。） 成程私

は、膝をはだけて、だらしなく股の眞中へ顎から蝙

蝠傘を支いて土百姓のやうだつた。（おい）と

立つ。（まあ、松葉が。）と麥藁帽子の頂を掬

つて、さらりと拂つて、其の松葉を、一葉二葉層に

噛んだ、立姿を見た時は、常盤樹の緑の中に、岨を

したゝる露はあり、顔も胸も、手も襟も、宛然夕顔

の花のやうだと思つた。

何の鉢にも、あんな白い、そして床しい薫なのは  
ない。（一目見たばかりでも涼しく成る、暑さも

何も忘れる。と言つた、婆さんが今夜も言つた  
（あんな又雪のやうな、お色の白い方は  
あるものぢやない）

勘七は身震したが、四邊を視て、和りとした顔色  
か容易でない。其の夕顔に頬を當て、もじや／＼  
の鬚鬚が、蟻のやうに白い花瓣の一重を縫ふと、花  
はひらりと頬を包んで、抱き寄せるやうに、こんも  
りと浮出したと見るや、勘七は口を開けて、唇を當  
てた。金箔を呼吸で掠めて、ほんのりと薫ると思ふ  
と、甘い露が垂々と成る、息を引いて舌で吸つた。

と彼は氣が狂つてから人に饒舌る。

あれ見よ、颯と唐紅の夕立を、一筋瀧の如く屏風  
に流して、夕顔の花に注いだのは、駒（猫）が鼠  
を銜へたのである。

それは鼠の血汐であつた。

「わッ。」

と叫んで、尻居に反つて、舌を吐いた、血だらけ



「勘七だ、私だ、お駒。」

「後生です、放して。」

「何うもしない、何うもしない。」

「堪忍して、堪忍して」

「え、何うするものか。お前の身を食ふものか。」

何故、何故然うだ

お駒。」

「御免なさい、可厭ですよ。」

「が現で云ふ。」

「何、可厭だ、御」

免。ただ。」

と唸ると、頬に頬を合せた時、お駒の姿は裾をな

ぞへに、足が縮んで、両手は柔かにバタリと落ちた。

天邊に圓鬚をのせた、目の圓い、出額の上さんの

顔が、二階へ迫出した、と見るや否や、眞倒に成つ

て脚を上へ、どた／＼と、辻落ちた。「きやつ。」

多勢が立合つた時は、勘七の頭髪が逆立ち、目の

色變つて、あらう事か、衣紋の亂れた、眞白なお駒

の乳に、件の曲尺が當つて居た

が、突然物干へ飛出すと、どしや降りの中で故と

人を怯す悪戯のやうに、

「ぎやツ。」と叫んだ。それが、猫にも鴉にも似て居たのである。

お駒は、ものゝ半月ばかり煩つて正氣に返つた。

そして、かげながら勘七のために、快復を祈るのに、本尊を拜んで居る。佛體は月の如き夕顔の花の中に、觀世音を刻んだのである。

此の話は、婦人から其の御像をあつらへられた、名譽の佛師から傳へ聞く。佛師は、これを、夕顔觀世音の由來と云ふ。

【完】